

新羅への道

森 脇 一 夫

万葉集卷十五の前半部は、目録によると、天平八年丙子夏六月、わが国から新羅に遣わされた使人ら一行の、悲別の贈答歌や海路における慟情および停泊した各地で折にふれて誦詠した古歌、あわせて一四五首を集録したものである。

この遣新羅使のことについては、続日本紀の記事によってその大体を知ることができるが、それによると「天平八年二月、戊寅（二十八日）、以_テ從五位下阿倍朝臣繼麻呂_ヲ、為_ス遣新羅大使_ト」とあり、ついで「夏四月、丙寅（十七日）、遣新羅使阿倍朝臣繼麻呂等拜朝」とある。「拜朝」というのは、遣外使に任ぜられたものが出發準備完了とともに皇居に参入して天皇に挨拶することである。拜朝が済んでから一か月ばかりたつと、天皇は副使以上を呼んで節刀を授けるのが例で、そのことを辞見または拜辞といい、節刀を授けられた者を執節使ともいうのである。辞見は天皇に対する別れの挨拶でもあるから、内裏を退出したら家に帰らずそのまま出發しなければならぬ。このときの記事には辞見のことは見えないが、拜朝が四月十七日に行なわれたのであるから、辞見は五月中旬に行なわれたものと思われる。使節団の首脳構成は、

大使	從五位下	阿倍朝臣繼麿
副使	從六位下	大伴宿祢三中
大判官	從六位上	壬生使主宇太麿
少判官	正七位上	大藏忌寸麻呂

である。目録に「夏六月」とあるのは、難波津を船出した時期を示すものである。船出のときの歌に、

潮待つとありける船を知らずして悔しく妹を別れ来にけり(三五九四)

というのがあり、「潮待つ」は大潮の日を待つことであるから、六月の満月のころの大潮を待つて船出したのである。

これらの歌群にあらわれた地名をたどってみると、船は、敏馬の浦(神戸灘区付近)・武庫の浦(神戸港付近)・明石の門(明石海峡)・藤江の浦(明石市の西部)・印南郡麻(加古川の河口付近)・飾磨川・家島・多麻の浦(玉島)・鞆の浦(福山市鞆町)と順調に進み、六月二十二日か二十三日ころ、備後の国の長井の浦(広島県三原市糸崎町)に着いた。

さらに海岸沿ひに西へ向かい、安芸の国の風速の浦(広島県豊田郡安芸津町西方)・長門の島(倉梯島)・周防の国の麻里布の浦(岩国市の東方)・大島の鳴門(大島の瀬戸)を過ぎて熊毛の浦(山口県熊毛郡上の関海峡付近)に着いた。そこを出発して、さらに海岸沿いに進んだが、佐婆郡の海上で逆風に遭い、船は一晩中波浪にもてあそばされて漂流し、門司と下関との間の早瀬の瀬戸を目ざすべきを、押しもどされて、豊前の国下毛の郡分間の浦(大分県下毛郡今津町付近)に漂着した。ちょうど颱風の季節に当たっていたわけである。

こうして月を越えて七月に入り、立秋を過ぎて秋風の立ち初めた七夕のころ、ようやく筑紫の館(博多)に到着することができた。

筑紫の館にしばらく滞在して、いよいよ玄海灘に漕ぎ出すのであるが、玄海は名に負う荒海であるから、十分な準備と安全な天候とを選ばねばならない。韓亭(福岡県糸島郡北崎村)・引津の亭(糸島郡芥屋村)・肥前の狛島の亭(神集島)のあたりなどに泊りを重ねて、壹岐島へと向かった。「亭」というのは、大陸への往來に、天候待ちをするための船着場や宿泊の設備のある所のことであろう。

瀬戸内海の海上で、一夜颱風に遭って漂流したときには、

大君の命恐み大船の行きのまにまにやどりするかも(三六四四)

という歌を詠んで元氣であった雪連宅満が、壹岐島に着いてから急に発病して死ぬという、思わぬ不幸に見舞われた。三六八八番歌の題詞に「忽遇鬼病二死去」とある。「鬼病」は和名抄に「疫(昔衣夜美一民皆病也)」とあって、

トキノケともいわれ、「民皆病也」とあるのは伝染病のことである。続日本紀によれば、前年の天平七年の条に「八月、乙未（十二日）、勅シテ曰、如聞、比日大宰府ニ疫死ル者多シ」とあり、ついで、「閏十一月、戊戌（十七日）、詔ス、以テ災変數見、レ、疫癘不_レレ已マ、大赦ス_ニ天下_ニ」とあり、この年の記事の末尾にも「是歳、年頗_ル不_レ稔_ラ自_レ夏至_レ冬、天下患_ニ豌豆瘡_ヲ、俗曰_ク天死_ル者多シ」と記されている。割注にあるように、「豌豆瘡は俗に「裳瘡」といわれ、今日の天然痘である。皮膚に豌豆様の膿疱を生ずるのでこの名があり、死亡率の高い伝染病である。初め大宰府に発生し、たちまち九州全域に広まり、東進を始めたのである。伝染の経路は、七年三月、遣唐使多治比広成らが帰国し、その前後に新羅からの使節も来朝したので、それらの中に罹患者がいたのであろう。宅満の鬼病も、たぶん天然痘であったと思われる。長歌三、短歌六の挽歌がある。

杳岐島を後にして対馬の浅茅の浦に着いたときは、さむざむとして時雨が降っていた。ここでは順風を得ず五日間も滞留したと題詞に記している。竹敷の浦に停泊したときには、一行の首脳がこぞって歌を詠んだ。そこで詠まれた歌の中に、

天雲のたゆたひ来れば九月の黄葉の山もうつろひにけり（三七一六）

というのがあり、すでに九月になっていたことがわかる。難波出發以來すでに三か月も経っていたのである。

往路の歌は、ここでぶつりと断れて、新羅での消息を伝えない。しかし、彼らはともかくも新羅の都慶州にたどり着き、そこでいろいろなものを見たはずである。現在ものこっている七世紀の初めに作られた瞻星台や新羅王室の離宮であった鮑石亭、全土統一の偉業を成し上げた太宗武烈王陵、また文武王を葬った海中陵をはじめ多数の古墳群、当時の新羅文化を象徴する皇龍寺や芬皇寺の莊嚴にも接したはずである。にもかかわらず、一首の歌もないのは不思議である。続日本紀、天平九年二月の記事に「遣新羅使奏_テ新羅ノ国失_ニ常ノ礼_ヲ不_レ受_ニ使_ノ旨_ヲ」とあるから、彼らはその使命を達成することができず面目丸つぶれで意気あがらず、歌どころではなかったのであろう。復路も瀬戸内海に入るまで一首の歌もなく、播磨の国の家島まで来たとき、やっと五首の歌をとどめたに過ぎない。

続日本紀、天平九年の記事に「正月、辛丑（二十七日）、遣新羅使大判官從六位上壬生、使主宇太麻呂、少判官正

七位上大藏忌寸麻呂等入京^ス、大使従五位下阿倍朝臣繼麿泊^テ津嶋^ニ卒^シ、副使従六位下大伴宿祢三中英^テ病^ニ不得^ニ入京^ニ「スホトラ」^トあるのによれば、大使の繼麿は帰途対馬において客死し、副使の三中也途中で発病して、一行といっしょには帰れなかったのである。三中が病癒えて入京したのは、それから二か月も後で、続日本紀は、「三月、壬寅（二十八日）、遣新羅使、副使正六位上大伴宿祢三中等四十人拜朝」と記している。三中の入京を待って参内したのである。

繼麿や三中の病氣も天然痘であつたと思われる。天平七年の夏大宰府に発生して以来、その流行は猖獗をきわめ、しだいに東進して、天平九年の春には奈良の都にも侵入し、庶民はもとより高位高官の貴族もばたばたと斃れた。続日本紀によって主だった人々の名をあげてみると、参議民部卿正三位藤原房前、大宰大貳従四位下小野老、散位正四位下長田王、中納言正三位多治比県守、参議兵部卿従三位藤原麻呂、参議式部卿兼大宰帥正三位藤原宇合らが、四月から八月までの間に相ついで没している。

二

次に、天平八年の遣新羅使がどういふ状況のもとで、いかなる目的使命を帯びて出かけて行ったのかを前後の事情に照らしあわせて検討してみよう。

天智天皇の二年（六六三）、白村江^{はくまのえ}の敗戦によって、わが国は朝鮮半島における古代任那^{にんな}以来の權益をことごとく失ったが、これによって新羅は高句麗と百済とを滅し、一挙に半島の全土を統一して、強力な勢威を誇るようになった。いきおいわが国においては、これに対応する施策に力を注ぐことが最緊急の状況となった。天智三年（六六四）、いちはやく筑紫に水城を築き、対馬・壹岐・筑紫に烽^{ほろ}を設け、防人^{まもり}を置くなどの警備体制をととのえたのは、そのいちじるしい現われであるが、同時に大陸との外交も国の安全にとって重要な課題となった。新羅の背後には、唐が強大な勢力と文化とをもって繁栄を誇っていたのである。天智四年（六六五）と、同じく八年（六六九）との二度にわたる遣唐使、下つて元正天皇の元年（七一七）と、聖武天皇の天平五年（七三三）との、それぞれ四隻、五五七人と五九四人という大規模な遣唐使の派遣は、この問題の重要性を有力に物語っている。

新羅との交流も、その後きわめて頻繁になり、天智・天武の両朝になると、ほとんど毎年のように彼我の間に遣使の交換がなされた。

続日本記によって、天平年代に入ってからのが国と新羅との関係を見ると、まず天平二年(七三〇)九月には諸國の防人を徵發することを停止した。これは何よりも國際緊張の緩和によるものである。天平四年(七三二)正月二十日、從五位下角朝臣家主を遣新羅使に任じ、二月二十二日拜朝、まもなく出發、同年八月十一日に帰還した。

一方、この年(七三二)正月二十二日には、新羅の使金長孫らが博多にやって来たが、大宰府政庁に呼んだのは三月五日であった。一か月以上も待たせたわけである。そして、一行四十人が奈良の都に入ることができたのは五月十一日で、五月十九日に拜朝したとあるから、来朝以来四か月もたつてからであった。先方の出方を警戒したのかどうか、くわしいことはわからないが、ともかくも、わが方のあつかいが冷たかったことは間違いない。このとき、金長孫らの提案によって、新羅使の来朝は三年に一度ということになった。

このときの約束によって、天平六年(七三四)十二月六日、新羅の使金相貞が大宰府にやって来た。そして、天平七年(七三五)二月十七日に入京した。そこで朝廷は、中納言正三位多治比真人泉守を兵部の曹司にやって、新羅使入京の旨を問わしめた。かれらの言うには、新羅の国はこのたび国号を改めて王城国と称することになった。それを伝えるに来たのだと。ところがわが方はそれを認めず、天皇への接見も許さず、その使を追い還してしまったのである。「王城国」というような尊大な名称が気に入らなかつたのであろうが、そのため、両國間の関係が悪化したのはいうまでもないであろう。

そうした事情があつて、兩國間の関係を調整するためか、翌天平八年(七三六)、今度はわが方から遣新羅使を差し向けることになった。二月二十二日遣新羅使の任命、同四月十七日拜朝、六月初め出發のことは、本稿の冒頭に述べた通りである。

さていよいよ遣新羅使に任ぜられて出發しなければならぬ阿倍継麻呂以下、少なくとも副使・大判官・少判官らの首脳陣は、前年以來のいきさつや、先方の思わくなども知っており、このたびの使命の容易ならぬことも自覚していたであろうから、出發にあたっては気が重かつたに違いない。

それに、何といつても、玄海灘や日本海の荒浪を乗り切つて行かなければならない。遣唐使の場合もつと大変で、三年前の天平五年(七三三)四月に難波を出発した多治比真人広成らの遣唐船四隻のうち二隻は難波、あとの二隻は崑崙に漂着、大使広成がただ一人翌天平六年(七三四)十一月に種が島に漂着、二年後の八年(七三六)七月、副使中臣名代が唐人三人と波斯人一人を伴つて帰国しただけで、五九四人のほとんどが帰国できなかつた。遣新羅使の場合、それほど危険度は高くなかつたにしても、継麻呂以下の使人らは、そういうことをも聞き知つていたのであろうし、颱風時期に近い出発ということでもあり、内心の不安は隠せなかつたであらう。不幸にもその不安は現実のものとなり、往路壱岐の島で雪宅満が死に、復路対馬では大使阿倍継麿を喪い、副使大伴三中也途中で病に倒れるという惨憺たるありさまになつた。続紀や万葉に明らかな証言こそないが、この三人のほかにも相当の犠牲者があつたのではないかと思われる。万葉集卷十五にのこされた彼らの作の底流には、右に述べたような不安と憂鬱とが潜んでいるものと見ることができるといふ。

三

ところで、万葉集卷十五所収の遣新羅使人等の歌一四五首のうち、作者の明らかなものは、長歌二首、短歌二七首、旋頭歌一首の計三〇首、人麿および人麿歌集の歌を含む古歌が長歌・短歌合わせて一二首で、その他の長歌二首、短歌九九首、旋頭歌二首の合計一〇三首には作者の名が記されていない。遣新羅使というような、はっきりした組織的な集団の作品集に、かくのごとき大量の無名歌があるということは、いかにも不審であるが、これについては、おおよそ次のような二つの説が提出せられている。

一つは、これら無名歌の作者および遣新羅使歌全体の集録者は同一人であらうという説で、初め井上通泰博士や鴻巣盛広氏らが漠然となえられたのであつたが、山田孝雄博士は具体的な人名をあげて、一行中の副使大伴宿禰三中がこれらの歌の集録者であり、無名歌の中には三中の歌が少なからずあるであらうということを示唆せられ、追徹朗氏は、一〇三首の無名歌はすべて三中の作(うち五首は三中の妻であるとせられた。また土屋文明氏は、集録者も無名歌の作者も同一人ではあらうが、その身分は少判官の下、録事程度の者であらうとし、加藤順三氏は、劈頭約十首の

男女贈答頭を中臣宅守・狭野茅上娘子のものと想像し、その他の無名歌と二人の悲恋歌との間に一脈相通の沈静憂愁な音律のあることを指摘せられた。

これに対して、作者多数説となえられたのは糸川定一氏と高木市之助博士^{注14}とである。糸川氏は、万葉集中詠歌の多い作者でも八〇首以上に及ぶものは僅かに三人に過ぎないことから考えて、一〇〇首に近い無名歌を一人の作とすることは困難で、多くの歌人の作と考えたいように思うといわれた。高木博士はこれを受けて、これら一〇〇首に近い大量の歌には個性的なものが感ぜられず、そこに感ぜられるものは、ある民族的なものであるとし、そこにあらわされたものは、新羅へという朝廷の意志に背き、むしろそれに反発して、一日も早く彼らの郷土へ走り去ろうとする民族の意志でしかないと述べ、その中の無名歌は、名のある作家よりも一段低い、鎌工・権師・水手長・水手など民衆的な多数の作者であろうとせられた。むしろこうじ・みのる氏も、個人的な視野をしりぞけ、「民族の意志」という高木博士の立場を支持せられた。

こうした抵抗の論理は、近代的進歩派の人々には受け入れられ易いと見えて、昭和四十八年一月十八日号の「朝日ジャーナル」の座談会^{注17}で、加藤周一氏が「朝鮮(新羅)に行く、使節の人たちの歌がありましたね。あれはひどい。『防人の歌』が兵隊かせいぜい下士官級の人たちの作品であったのに比べれば、外交官の歌ですから。外交官が任地へ向かう途中で歌をつくっているわけで、もう少し外交問題とか国際関係論が出てきてもいいと思う」というようなことを語っておられる。

しかしながら、万葉集の作品に、こうした左翼史観をもち込んで、思想性や近代的な国際関係論を期待すること自体、時代錯誤ではなからうか。万葉集には、これとあまり年代の距たらないころの遣唐使の作が見られるが、たとえば、大宝元年(七〇一)正月遣唐少録となり、慶雲元年(七〇四)七月に帰国したと思われる山上憶良の、

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ(六三)

にも、望郷の念のみあらわで、使命観のようなものは見られない。思想家といわれる憶良にして、かくのごとくである。

天平勝宝二年(七五〇)九月遣唐大使に任ぜられ、同四年(七五三)に入唐した藤原清河も、

春日野に齋く三諸の梅の花栄えてあり待て還り来るまで(四二四一)

あらたまの年の緒長くわが思へる兎らに恋ふべき月近づきぬ(四二四四)

の二首をのこしているが、ここにも使命観や国際関係論は見られない。むしろこのときの副使大伴古磨らに餞した、多治比鷹主の「韓国に行き足はして帰り来む大夫建男に御酒たてまつる」(四二六二)や、天平五年(七三三)三月の遣唐大使多治比広成に贈った、山上憶良の「好去好来」(八九四)の歌など、送る側の人々の作に使命達成を励ます心が見られるに過ぎない。

それらに比べると、まだしも遣新羅使らの作の方に、

大君の命恐み大船の行きのまにまにやどりするかも(三六四四・雪宅麿)

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあれば恋ひにけるかも(三六八八・大使)

など、ある程度使命観に裏づけられた作が見られる。一般に遣外使の歌に防人の歌ほどの強さがないのは、いつの世にも見られる知識階級のもつ宿命的な弱さによるものである。

またこれらの歌が個性的でないという点についても、私には異論がある。すなわち、この一連の歌群には、旅中の感懐をのべるという一貫したテーマがあつて、統一された組織をもっている。それは巻五の「梅花の歌三十二首」などと比較してみれば明白である。梅花の宴で詠まれた歌には、題材にも表現にも類型的なものが多く、いかにも雑然としていて、多数の作者の作品を集めたものであることが一見して明らかであるが、遣新羅使歌には、類型や重複がほとんど見られず、羈旅の日程に従つて、前後相呼応するような有機的な関連さえ見られるのである。

四

右の諸説のなかで、加藤順三氏の提案は、今日までほとんど問題にせられることがなかったのであるが、示唆するところが多く、真面目に検討してみる必要があるように思われる。

いうまでもなく、万葉集卷十五は、前半の遣新羅使人等の歌一四五首と、中臣宅守および狭野茅上娘子の相聞歌六四首とから成る、きわめて特異な巻である。この二つの歌群がどういふ理由で一つの巻に収められたかということは、

今まではほとんど考えられたことがなかった。私は、この二つの歌群には相当に深い関連があるものと考え、他の卷々を見て、一つの卷に全然関係のない作品を不用意に収めたようなものは見当らないからである。

中臣宅守が越前の国に流されたのは、続記にも記載がなく、いつのことか不明であるけれども、天平十二年六月の大赦に洩れたことが見えているから、流罪はその一年か二年前のことと推察せられる。してみると、彼が天平八年の遣新羅使一行に加えられたかも知れぬという可能性は十分に考えられる。もし彼がそこに加えられていたとすれば、おそらく少判官の下、録事くらい役どころであつたろうと思われる。この点では、土屋文明氏の推定が當つていように思われる。

右のような想定のもとに、二つの歌群を比較検討してみると、次のような、いちじるしい関連性のあることが認められる。

はろばろに思ほゆるかも然れども異しき心を吾が思はなくに(三五八八・使人無名歌)

あら玉の年の緒長く逢はざれど異しき心を吾が思はなくに(三七七五・宅守)

これらの歌に共通な四・五句「異しき心を吾が思はなくに」は、東歌に「唐衣裾のうち交へあはねども異しき心を吾が思はなくに」(二四八二)があるだけで、万葉集中三例を見るに過ぎない数少ない歌語であるが、そのうち、きわめて類似した内容をもつ二例が、遣新羅使人無名歌と宅守作とに見られるのは、全くの偶然とは思われない。

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死なぬべし(三五七八・使人の妻)

わが屋外の松の葉見つつ吾待たむ早帰りませ恋ひ死なぬとに(三七四七・茅上娘子)

他国は住み悪しとそいふすむやく早帰りませ恋ひ死なぬとに(三七四八・茅上娘子)

万葉集中「恋ひ死ぬ」という発想をもつ作は、作者の明らかなものでは、笠女郎(五九八・六〇三・六〇五)と坂上大嬢(七三八)および大伴家持(七四九)の作を見るだけで、作者未詳歌にかなり多くの例があるとはいふものの、遣新羅使人の妻の作と茅上娘子の作との間には、きわめて近しい発想が見られるように思う。また、

大船を荒海に出します君恙むことなく早帰りませ(三五八一・使人の妻)

この「早帰りませ」という語調も、先の茅上娘子の語調そのままである。

別れなばうら悲しけむ吾が衣下にを着ませ直に逢ふまでに（三五八四・使人の妻）
これは難波出航のときの使人の妻の作であるが、茅上娘子が宅守に贈った歌にも、
白袴の吾が下衣失はず持てれわが背子直に逢ふまでに（三七五二・茅上娘子）
白袴の吾が衣手を取りもちて齋へわが背子直に逢ふまでに（三七七八・茅上娘子）
逢はむ日の形見にせよと手弱女の思ひ乱れて逢へる衣そ（三七五三・茅上娘子）
などというのがある。妹の形見の衣を下に着るといふ意味の歌は、作者の明らかなものでは家持作（七四七・一六二六）
のほかには見られないものであり、特に結句の「直に逢ふまでに」の用法は、ほとんど同一人の作たるを疑わしめな
いほどの近しさである。

これに対応する使人の無名歌に、

吾妹子が下にも着より贈りたる衣の紐を吾解かめやも（三五八五・使人無名歌）

わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば（三六六七・使人無名歌）

独りのみきぬる衣の紐解かば誰かも結はむ家遠くして（三七一五・使人無名歌）

旅にても喪なく早来と吾妹子が結びし紐はなれにけるかも（三七一七・使人無名歌）

などがあるが、折にふれて詠んだ同一人の作と思われる。ところが、越前に配流せられた宅守の作にも、

吾妹子が形見の衣なかりせば何物もてか命継がまし（三七三三・宅守）

というのがあって、きわめて近似した発想をもっている。

宅守と茅上娘子との贈答の歌には、次のようなものもある。

さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る夜は実なきものを（三七六〇・宅守）

宮人の安眠も寝ずて今日今日と待つらむものを見えぬ君かも（三七七一・茅上娘子）

これとほとんど類同的な遣新羅使人の無名歌をあげると、

栗島の逢はじと思ふ妹にあれや安眠も寝ずて吾が恋ひ渡る（三六三三・使人無名歌）

妹を思ひ眠の寝らえぬに 暁の朝霧隠り雁がねぞ鳴く（三六六五・使人無名歌）

妹を思ひ眠の寝らえぬに秋の野にさ男鹿鳴きつ妻思ひかねて（三六七八・使人無名歌）
夜を長み眠の寝らえぬにあしひきの山彦響めさ男鹿鳴くも（三六八〇・使人無名歌）
秋の夜を長みにかあらむ何そこば眠の寝らえぬも独り寝ればか（三六八四・使人無名歌）
などがあり、

思はずも実あり得むやさ寝る夜の夢にも妹が見えざらなくに（三七三五・宅守）
思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる（三七三八・宅守）
という宅守作の夢の歌があるのに対して、

波の上に浮寝せし夜何と思へか心悲しく夢に見えつる（三六三九・使人無名歌）
吾妹子が如何に思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる（三六四七・使人無名歌）
秋されば恋しみ妹を夢にだに久しく見むを明けにけるかも（三七一四・使人無名歌）

などの遣新羅使人無名歌がある。とりわけ、宅守の三七三八番歌と使人無名歌の三六四七番とは、四五句全く同じく、類想歌でもあり、同一人の作として少しも不思議でない。

宅守が越前配流の旅に出発しようとしたときに、茅上娘子が火のような情熱を傾けて歌った。

君が行く道のながてを繰り重ね焼きほろぼさむ天の火もがも（三七二四・茅上娘子）
と、遣新羅使人等が難波を出発するに際して、使人等の妻の一人が詠嘆して歌った、

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ（三五八〇・使人の妻）

とを比べてみると、一は熱烈に、一は沈静にという違いはあるが、第一句の「君が行く」の語調はもとより、その発想の底には一脈相通するものがあるように思われる。またこの妻の霧の嘆きに対応するものとして、

秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく嘆きしまさむ（三五八一・使人無名歌）
わが故に妹嘆くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり（三六一五・使人無名歌）

沖つ風いたく吹きせば吾妹子が嘆きの風に飽かましものを（三六一六・使人無名歌）
などの無名歌があり、いずれも妻の霧の嘆きに報えた同一人の作と思われる。

以上を総収して言いうることは、天平八年の遣新羅使人等の新羅への道は、悪天候と天然痘の流行、彼我兩國の外交關係悪化などの諸の悪条件に妨げられた、きわめて困難な旅程であったということであり、万葉集の作品に即して言えば、卷十五前半の遣新羅使人等の作を伝える無名歌は、すべて後半悲恋歌の作者中臣宅守の作であろうと思われるし、冒頭五首の女性の作も、茅上娘子の作に擬することを妨げないように思われる。

そう考えることによって、卷十五を構成する前後二つの連作群を一つの巻に収めた理由もうべなわれるのであるが無名のままここに収録せられたのは、録事であった宅守の手控えが、配流の事件をひき起したときの贈答歌とともに、かつて使節として新羅への道に上司であった大伴三中的手に渡り、三中と親しかった家持らによって一卷にまとめられたのであろう。無名のまま収録されたのは、その時点において、おそらくは、罪をばかったものであろうかと思ふのである。

こうしてみると、私の想定する万葉集卷十五における新羅への遙かなる道も、越前への配流の道も、ともに険しい激動荆棘の道であったということができる。

注1 日本書紀によれば、齋明七年正月、難波を出発して西征、熟田津到着まで九日を要しているので、それより二三日少ないものと見る。

- 2 新羅第二十七代善徳王の十六年（六三二）の造成。
- 3 花崗岩で鮑（あわび）の形に造り、流腸曲水の遊びを催した。
- 4 周囲一〇四m、高さ一一mの円墳。陵の前にある碑文を載せた大亀の石像は当時の写実的作風を伝える。
- 5 海面から一〇二m、水中の石函の中に安置せられている。
- 6 第二十七代善徳女王の三年（六一九）の建立、自然石を煉瓦のように刻んで組み上げたもの。百済の建築家を呼んで造らせたという。
- 7 任那は現在の慶尚南道金海付近であろうという。現在は駕洛国首露王陵が残るのみ。

- 8 井上通泰著『万葉集新考』
- 9 鴻巣盛広著『万葉集全釈』
- 10 山田孝雄「万葉集と大伴氏」(美夫君志会編『万葉集新説』所収)
- 11 迫徹朗「大伴三中与遺新羅使歌の主題」(『国語と国文学』32巻9号、昭30年9月)
- 12 土屋文明著『万葉集私注』
- 13 加藤順三著『万葉美論』
- 14 桑川定一「卷十五論」(『万葉集講座』春陽堂)
- 15 高木市之助「新羅へ」(『国語と国文学』31巻3号、昭29年3月)
- 16 むしゃこうじ・みのる「遺新羅使歌の背景」(『国語と国文学』33巻8号、昭31年8月)
- 17 座談会のメンバーは、五味智英・三好行雄・加藤周一の三氏。